「音楽現代」'96年6月号

コンサート・クリティーク——演奏会評

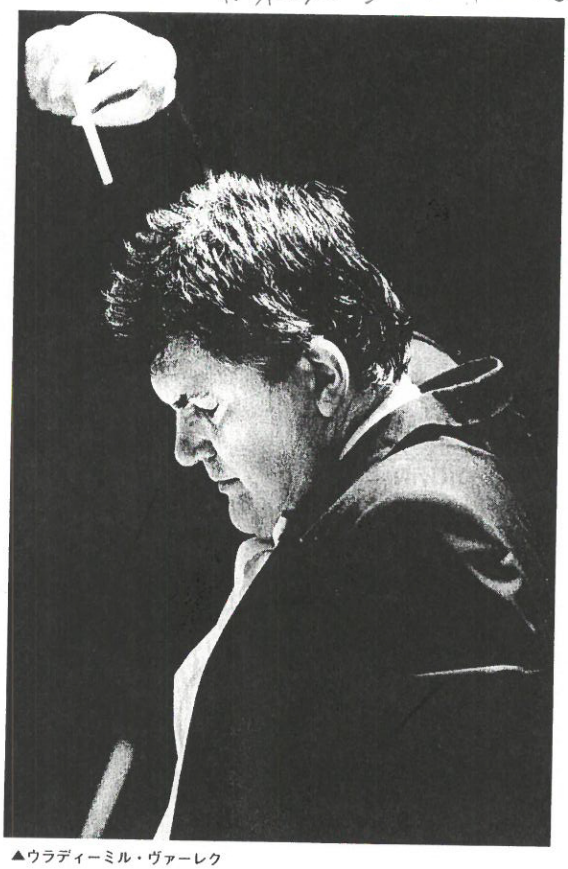
東京音楽界

オーケストラ

◉東京ニューシティ管弦楽団第7回定期演奏会

この4月から在京「第10」のプロ・オーケストラとして正式に認められることになった東京ニューシティ管。実力の方もプロの名に恥じないめざましい充実ぶりである。当夜も常任、内藤彰の指揮で1曲目はラヴェル「亡き王女のためのパヴァーヌ」。遅めのテンポのせいか全体に牧歌的で流れの良さは今一つだがラヴェルの詩情はよく出ている。特に弦は非常に良く厚みにも欠けてはおらず主題の三現におけるハープとの絡みなど実に優雅だ。

2曲目のラロ／スペイン交響曲は残念ながら肝腎の千住真理子が不調で、後半やや盛り返し一応それらしく弾いてはいたものの琴線に触れて来なかった。最後のチャイコフスキー「悲愴」では内藤の明解でキビキビした指揮が小気味よく第1楽章主部などスポーティな前進性が目立ち、第2楽章の歌わせ方もなかなか良かったが全体としては尻上がりの名演となりスケルツォの白熱が当夜の白眉だった。特に打楽器の効果は圧巻。フィナーレも同様でオケの健闘が光ったが、コーダで心臓の鼓動を思わせる低弦が強めに奏されたのも効果的で印象に残った。(3月30日、北とぴあさくらホール)　(浅岡弘和)



▲ウラディーミル・ヴァーレク

◉若杉弘＋NHK交響楽団／ブルックナー・チクルス

日本初演だったメシアン《かの高みの都市》が圧巻。作品には小オーケストラのためのという副題がついているが、むしろまさしくメシアンの響きがゆったりと流れる管弦オケを静とするなら、ピアノ（木村かをり）と4つの木・鉄琴群は目まぐるしいばかりの動という対比の形を取る。動セクションの歯切れ良い演奏が作品に華を添えたのは勿論だが、それ以上に若杉弘の明快な構造把握が良い結果を生んだといえる。

だが、本チクルスの主役たるブルックナー《交響曲第8番》（ノヴァーク版）は、各主題の立上がりを明確にした点が作品の輪郭を浮き彫りにする効果はあったにせよ、フレーズが細切れに聴こえたのは否めない。恐らくこれは日本のオケに共通するいわゆる息の短さに起因するものであるにしても、それを踏まえた上でこの音楽のもつ雄大な流れを表現するように努めないと、聴き終わった後の深い余韻は訪れないのではなかろうか。(3月31日、サントリーホール)　(中村　靖)

◉日本フィルハーモニー交響楽団創立40周年記念「20世紀の作曲家たち」I

日本フィルが、年4回×5年計20回の新シリーズを開始した。尚、初年度のテーマ作曲家は、ショスタコーヴィチとの事。

第1回の曲目は、フィンランドの重鎮＝サリネン《交響曲第2番～打楽器独奏と管弦楽の為の交響的対話》(73)、ラヴェル《ピアノ協奏曲》とショスタコーヴィチ《交響曲第6番》。

サリネン作品はノールショピング響の委嘱作で、梅津千恵子の爽やかなソロとオケの真摯な演奏は新シリーズの

スタートに相応しかったが、作品自体

ど聞き慣れない音楽なので他の演奏と

予想に違わない中身の濃い演奏で